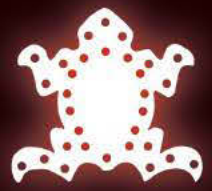


▲蛙形飾金具

苅田町歴史資料館

文化財ガイドブック

発　行　日　平成22年8月31日(第2刷)
企画・発行　苅田町生涯学習課文化係・苅田町歴史資料館
所　在　地　〒800-0392
福岡県京都郡苅田町富久町1丁目19番地1
TEL(093)-434-1982
印　　刷　有限会社北九州カーボン印刷

苅田町教育委員会

苅田町の概要

苅田町は福岡県の北東部、北九州市と行橋市の間に位置する、人口約3万5000人、面積約46平方kmの町です。東は周防灘に面して、国際貿易港・苅田港と広大な臨海工業地帯が広がっています。そこには自動車・セメント工場をはじめとする日本有数の企業が進出・操業しています。一方西側はカルスト台地平尾台に連なり、国の天然記念物青龍窟や貴重な草植物の宝庫・広谷湿原など、豊かな自然に恵まれた地域です。近年は苅田沖に24時間利用が可能な海上空港・北九州空港が開港し、東九州自動車道苅田・北九州空港ICの開通と従来の苅田港と合わせ、陸・海・空の交通拠点となりました。

目　次 CONTENTS

苅田町の概要
苅田町歴史資料館 ……1

1.はじめに・苅田町の文化財一覧…2
2.旧石器時代 ……3
3.縄文時代～弥生時代 ……4
4.古墳時代……6
5.飛鳥・奈良時代 ……8
6.平安時代以降 ……9
苅田町の地図 ……10

1.青龍窟 ……12
2.広谷湿原……13
3.石塚山古墳 ……14
4.石塚山古墳出土品 ……15
5.御所山古墳 ……16
6.番塚古墳 ……17
7.岩屋古墳群 ……18
8.恩塚古墳 ……19
9.雨窪古墳 ……20
10.谷遺跡出土品 ……21
11.等覚寺出土経筒 ……22
12.内尾薬師如来 ……23
13.平清経塚 ……24
14.松山城跡 ……25
15.等覚寺の松会 ……26
16.苅田山笠 ……28
17.郡界石と里程標 ……29

苅田町歴史資料館

苅田町は1955年1月に苅田町・小波瀬村・白川村の1町2村の合併によって生まれた町です。江戸時代には農漁村、そして自然の遠浅を利用した製塩を営むだけの苅田町が近代産業の町として大きく発展し、変貌を遂げたのは大正時代に入ってからです。しかしそれ以前の歴史を紐解いてみると、町内各所に多くの文化財が残されています。近年の急速な開発に伴う発掘調査によって新たに多くの考古資料が出土していますが、苅田町歴史資料館はこれらの貴重な文化財の保護と啓蒙を目的に1975年に開館した京築地方では最も歴史のある資料館です。外観は太宰府市にある福岡県立九州歴史資料館を模して、六角形作りの特徴あるものとなっています。

町内から出土した考古資料を主に展示していますが、国指定の石塚山古墳に隣接する資料館として、遠方から古墳を見学にこられた方々をはじめ、考古学ファンには見逃せない葛川遺跡出土の土器など貴重な資料を展示しています。また、毎年秋には特別展を開催しています。

▶開館時間
午前10時～午後4時
▶月曜休館（祝日は除く）

入 場 無 料

1 はじめに

考古学は人類の過去を探り、その時の生活や文化を再構成する学問です。そのため、地下に埋蔵されている文化財を発掘することによって隠された歴史を探そうと努力します。

日本の考古学は明治以降、既に130年ほど経過しましたが、まだまだ新しい学問です。例えば、遺物を種類ごと形や文様などに分類してその型式ごとに年代や、地域の広がりを調べていましたが、近年では年輪年代確定法や放射性炭素年代測定法が開発されました。これらの新しい方法によって、日本の弥生時代は今までの常識より500年ぐらい古く、その始まりは紀元前9世紀から10世紀という説が登場しました。従来説では弥生時代の始まりは紀元前400年から遅くて紀元前100年くらいといわれていましたから、年代観さえも変わってゆきます。

最近は遺跡に関する発見が次つぎニュースになり、多くの方々が考古学に関心をもたれるようになりました。このガイドブックを片手に苅田町に残された遺跡や文化財を知って、苅田町の歴史にアプローチして頂きたいと思います。

■苅田町の文化財一覧

	種　目	名　　称	所在・保管場所	指定年月日	所　蔵
1	国・天然記念物	青龍窟	大字山口字青龍	1962年1月26日	
2	町・天然記念物	広谷湿原	大字山口字広谷	1999年7月16日	
3	国・史跡	石塚山古墳	富久町1丁目	1985年1月31日	
4	国・重要文化財	石塚山古墳出土品（三角縁神獣鏡他）	大字馬場	1953年3月31日	宇原神社
	町・考古資料	〃（三角縁神獣鏡片・琥珀製勾玉他）	富久町1丁目	1990年5月30日	町資料館
5	国・史跡	御所山古墳	大字与原	1936年9月3日	
6	県・史跡	番塚古墳	大字与原字尾倉	1960年1月5日	
7	町・史跡	岩屋古墳群（3～6号墳）	大字下片島字岩屋	1999年7月16日	
8	町・史跡	恩塚古墳	大字新津字恩塚	1989年5月8日	
9	町・史跡	雨窪古墳	若久町3丁目	1989年5月8日	
10	町・考古資料	谷遺跡出土品（唐三彩他）	富久町1丁目	1990年5月30日	町資料館
11	県・考古資料	銅製経筒2口	富久町1丁目	1959年3月23日	町資料館
12	県・彫刻	内尾薬師如来	大字馬場	1957年4月23日	宝蔵院相圓寺
13	町・石造品	平清経塚	大字馬場	1994年9月7日	
14	町・史跡	松山城跡	大字松山	1993年12月22日	
15	国・重要無形民俗文化財	等覚寺の松会	大字山口字等覚寺	1998年12月16日	
16	県・無形民俗文化財	苅田山笠	富久町1丁目	1973年4月19日	
17		郡界石	若久町3丁目		
		里程標	神田町2丁目		

2 旧石器時代

日本の文化の曙は約3万年前に始まると考えられています。日本列島に人々が住み着いて、縄文土器が登場するまでの間を、旧石器時代といいます。地質学の年代では「更新世」から1万2千年前の「完新世」にあたっていて、氷河の発達・後退を繰り返したので「氷河時代」とも言われます。

世界的な時代区分によれば、日本では、旧石器時代後期から人が住み始めました。この時代日本はアジア大陸と陸続きだったため黄土動物群と呼ばれるナウマンゾウやオオツノシカが陸橋を渡って日本列島にやってきました。それを追って人間も移り住んだと考えられています。旧石器時代では、人々が1ヶ所に定住せず、家族が中心の小さなグループを作って寝場所を探しながら歩き、獣を獲ったり、木の実を拾ったりして暮らしを立てていました。

苅田町内では最も古い遺物は青龍窟内から発見された今から約5万年以上前に生きていた東洋象（ステゴドンゾウ）の化石です。青龍窟からは他にもナウマンゾウやシカの化石が産出しています。苅田町での人間の痕跡を示すのは、富久遺跡から出土した三稜尖頭器と新津原山遺跡のスクレーパーです。

▲青龍窟ナウマン支洞産出
ナウマン象化石レプリカ
（北九州市自然史・歴史博物館所蔵）

▲富久遺跡出土
旧石器
三稜尖頭器

▲新津原山遺跡出土
旧石器　スクレーパー他

3 縄文時代～弥生時代

縄文時代は今から1万2千年前、土器が作られ始めた頃から、水田稲作が始まる2,400年前までの約1万年間続きました。旧石器時代に引き続き、狩猟・採集経済の社会ですが、弓矢が発明されるなど生活や生産のためのいろいろな道具が作られます。縄目のついた土器を縄文土器と呼び、それが時代を表す言葉になりました。縄文土器は世界で最も古く作られた土器です。縄文土器に象徴されるように縄文文化は海外文化の影響を受けることなく、独自の文明を発達させました。縄文時代はこの土器の変遷により草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6時期に区分されます。苅田町では山口遺跡から縄文早期に相当する押形文土器片が、浄土院遺跡からは後期に相当する鐘崎式土器や西平式土器、石器が出土しています。

弥生時代は朝鮮半島から水田稲作と金属器がもたらされた紀元前5～7世紀頃から紀元後3世紀半ばまでの時代です。稲作には水田を管理するための共同作業が必要であり、「クニ」といったまとまりができます。こうした作業のリーダーは次第に力を持ち、人々の間に階層ができ「王」と呼ばれる人物が登場します。中国の歴史書である『後漢書』には当時の日本に「奴国」「伊都国」「末盧国」といったクニグニの存在したことが記されています。北部九州の各地で発見された王墓と見られる墓の存在はまた、東アジア世界の中での弥生社会の実態を表していると考えられます。

金属器は日本列島にほぼ同時に青銅器と鉄器が大陸から流入しました。そのうちの鉄器は壊れにくく作業がはかどるため石器に変わって「農工具」として利用されるようになり、青銅器は主に「祭祀具」として用いられます。

採集社会から生産へという経済基盤の変化は土器のうえにも反映されました。弥生土器は基本的に貯蔵用の壷、煮沸用の甕、盛付け用の高坏・鉢から構成されています。この変化は明らかに農耕社会への変換に伴う食生活の変化を意味しています。弥生時代は弥生土器の変遷によって、早期・前期・中期・後期に区別されます。

葛川遺跡は前期、法正寺木ノ坪遺跡は中期、山口遺跡は前期・後期の遺跡に該当します。

▲浄土院遺跡出土縄文土器甕棺※

▲浄土院遺跡出土縄文土器甕棺※

※個人蔵

▲浄土院遺跡出土縄文土器

▲浄土院遺跡出土縄文土器

▲葛川遺跡出土弥生土器

▲葛川遺跡出土弥生土器

▲葛川遺跡出土石包丁

▲法正寺木ノ坪遺跡出土弥生土器

▲法正寺木ノ坪遺跡出土弥生土器

▲法正寺木ノ坪遺跡出土弥生土器

4 古 墳 時 代

死者を厚く弔う厚葬の習慣は前の弥生時代に始まりますが、一般の人々との墓とは規模や形が異なる大型の前方後円墳が現れる時点をもって古墳時代と呼びます。弥生時代に発生した身分の違いが発展し、より広い地域を「王」として人々を支配する権力者が生まれました。『魏志倭人伝』で有名な邪馬台国の卑弥呼が中国の魏王朝からもらったとされる景初3年（239）と正始元年の紀年銘を持つ三角縁神獣鏡は無銘のものを含めて500面近くが列島各地から出土しています。その分布や鏡の形式などから奈良盆地を中心として所謂ヤマト政権が確立したことが窺えます。ヤマト政権と各地の豪族は互いに同盟の関係を結んだ証に三角縁神獣鏡を共有したと考えられています。

古墳時代は紀元後250年から600年頃までで前期・中期・後期の3期に区分しています。古墳の副葬品は時期ごとに変化し、前期は鏡や石製の装身具など祭りの道具が中心でしたが、中期には鉄製の実戦用の武器・武具が中心となり、後期には武器類に装飾が施されるほか馬具や土器類が副葬されるようになります。こうした副葬品の移り変わりは権力者の性質が変化したことを表しています。

苅田町を代表する石塚山古墳は初期前方後円墳として著名ですが、前方後円墳は前方部を付設した後円部に長大な木棺と多くの副葬品を納めた埋葬施設を備え、ほとんど画一的な内容をもっています。古墳は各地域の有力者がムラの人々とのつながりや日本列島内での社会における立場を確認する儀式を執り行う場所でした。

また御所山古墳・番塚古墳は中期の前方後円墳です。この頃の古墳は大陸伝来の横穴式石室が普及し、須恵器を用いた新しい葬送儀礼が整えられました。古墳の墳丘には埴輪群が立てられ、古墳の景観も一新しました。御所山古墳からは丹塗りの円筒埴輪が、番塚古墳の石室からは大陸系の須恵器が出土しています。

古墳時代の後半になると有力者とは言えないけれど、多少とも財力のある一族の墓が造られます。規模はずっと小さく、グループを作って造られていることから、群集墳と呼んでいますが、苅田町では富久遺跡や南原古墳群がその代表です。

▲南原1号墳出土馬具

▲南原1号墳出土銀製耳環

▲新津原山遺跡出土装身具

▲南原1号墳出土須恵器　高坏

▲新津大内古墳群出土蕨手刀子

▲岩屋古墳群出土須恵器壺・装飾付器台

▲御所山古墳出土埴輪

▲御所山古墳出土埴輪

▲富久遺跡大溝出土円筒埴輪

▲南原1号墳出土形象埴輪

▲富久遺跡大溝出土円筒埴輪

5 飛鳥・奈良時代

592年に推古天皇が即位されて始まり、710年に奈良・平城に遷都されるまでの100年余りが飛鳥時代です。奈良時代は794年の平安京遷都までをさします。

飛鳥時代は古墳時代の終末期と重なります。目立つような古墳が造られなくなり、代わりに大寺院や宮殿が造られ、古代国家が成立します。推古朝に飛鳥文化、天武・持統朝に白鳳文化が花開き、原史時代～有史時代への移り変わりの時期に当たります。

奈良時代の日本は唐の制度にならって法律を整備しました。

飛鳥・奈良時代の日本は中国の先進的な制度や、文化が積極的に輸入され、天皇を中心とする支配階級は、中国の制度をまねて、律令制に基づく中央集権国家を作り上げました。

また6世紀中頃に伝えられた仏教は豪族を中心に広まり、各地に寺院が造られるようになります。苅田町内周辺の市町村には多くの古代寺院がつくられました。屋根瓦は、それぞれの寺院ごとに異なっており、バラエティーに富んだものとなっています。資料館には個人所蔵のコレクションが展示されています。

▲椿市廃寺　蠡弧文軒平瓦

▲菩提廃寺 単弁十六弁蓮華文軒丸瓦

▲菩提廃寺 変形唐草並列軒平瓦

▲上坂廃寺 単弁八弁蓮華文軒丸瓦

▲上坂廃寺 単弁十九弁蓮華文軒丸瓦

▲木山廃寺 単弁十八弁蓮華文軒丸瓦

6 平安時代以降

平安時代は桓武天皇が794年平安京に都を移してから1192年鎌倉幕府の成立までの約390年間をさします。平安時代初期の中央文化は唐の影響を強く受け、中国の青磁・白磁・黄釉陶などを多く輸入しています。器種では碗・皿が多いのが特徴です。町内山口遺跡は千を数える青磁・青白磁の破片が出土しました。

平安時代中期から台頭してきた武士は貴族層の没落によって勢力を伸ばし、平氏との戦いに勝った源頼朝が鎌倉幕府を開いて新しく武家社会が成立します。鎌倉時代～室町・戦国時代を大きくまとめて中世と呼んでいます。

中世は石塔の時代でした。五輪塔・宝篋印塔・板碑などさまざまな石造品が造られました。苅田町では平清経塚があります。

また平安時代に伝わった中国仏教（密教）の影響を受けて、全国各地に山岳修験の寺院が造られました。中世になると山岳寺院は修験道の組織化に伴い、山伏たちの修行の拠点としても発達しました。北部九州地域における経塚造営については宇佐宮並びに天台密教系の山岳修験に関わるものが大きく、苅田町の等覚寺遺跡はその好例です。

▲山口遺跡出土青磁碗

▲山口遺跡出土青磁碗

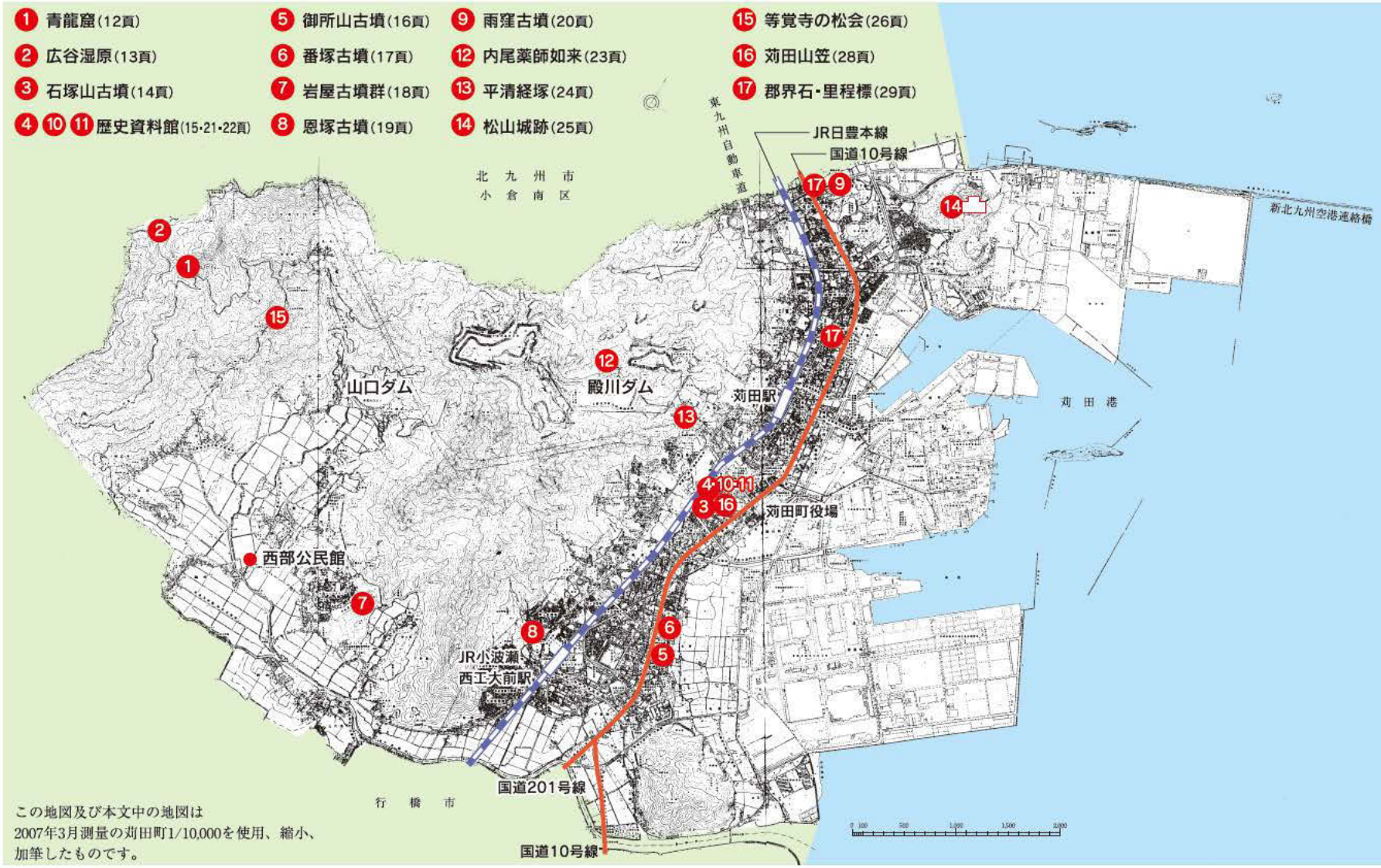
▲山口遺跡出土青磁碗

▲山口遺跡出土青白磁合子

▲山口遺跡出土青白磁合子

▲山口遺跡出土土馬

苅田町の地図



この地図及び本文中の地図は
2007年3月測量の苅田町1/10,000を使用、縮小、
加筆したものです。

指定年月日／1962年1月26日

1 青龍窟

所在地 大字山口字青龍

国指定 天然記念物

北九州市から行橋市・苅田町にかけて広がる北九州国定公園カルスト台地平尾台に無数にある鍾乳洞窟の中で最大級の全長2キロの長さと規模を誇る。本洞（洞口ホール）と多くの支洞からなり、内部が複雑な様相を呈す。東に向いて開口した洞口ホール内部は白山多賀神社（等覚寺）奥の院として、豊玉姫の祭壇が設けられている。ほかにも修験道時代の鎌倉時代にさかのぼる石仏が並んでいたことが知られているが、明治の廃仏毀釈によって往時をしのぶことはできない。

1993年の発掘調査では南北朝時代と考えられる土製の地蔵菩薩像が多く出土している。

洞窟の下層部分には水流の水平蛇行によってできた小ホールが各所にあり、美しい鍾乳石が多数見られ、神秘に満ちた空間を作り出している。また、支洞のひとつから氷河期のシカなどの動物化石に混ざってステゴドンゾウ（東洋象）やナウマンゾウの化石が見つかっており、化石の宝庫と呼ばれている。

▲青龍窟

▲青龍窟洞口ホール（本田茂氏撮影）

▲石柱状鍾乳石群（青龍クラブ撮影）

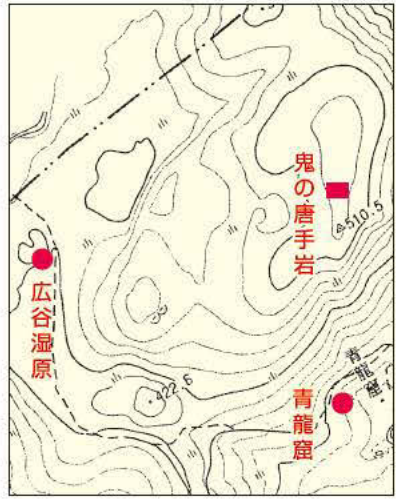
指定年月日／1999年7月16日

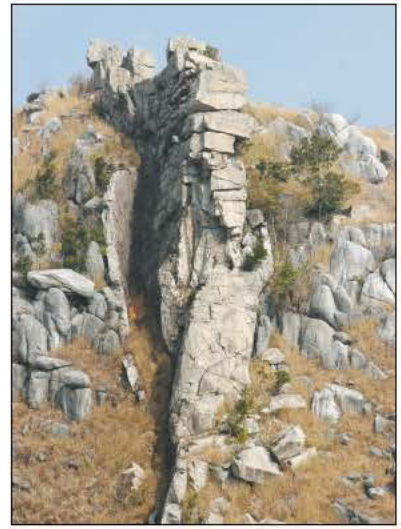
2 広谷湿原

所在地 大字山口字広谷

町指定 天然記念物

北九州国定公園内、青龍窟の西側、広谷と呼ばれる標高450mの盆地にある小さな湿地でモウセンゴケ・サギソウ・トキソウ・ツリフネソウ・ノハナショウブなどの湿原特有の植物が自生している。福岡県唯一の湿地であるが、カルスト台地での湿地は世界的にも珍しく、植物の中には、環境庁が指定する貴重な絶滅危惧種が多く含まれている。また、広谷の東側には鬼の唐手岩と呼ばれる奇岩がある。この岩は石灰岩地帯に花崗岩が貫入したもので、地表面では高さ約5mのオーバーハングした岸壁を作り、地下ではダムの役割を果たしていて、広谷湿原を形成する重要な役割を果たしている。





▲鬼の唐手岩

▲トキソウ

▲サギソウ

指定年月日／1985年1月31日

3 石塚山古墳

所在地 富久町1丁目

国指定 史跡

西側の山脈から伸びた舌状の低丘陵上の先端、当時の海岸線近くに築造された九州最大・最古の定型化した畿内型前方後円墳で、古墳の規模は全長130m・後円部径80mを測り、前方部が2段・後円部が3段築造である。墳丘全体に人頭大の葺石を葺いており、築造時には墳頂に複合口縁壷などの土器を樹立させていた。後円部中央に作られた主体部は竪穴式石槨で、内部に割竹型木棺を納めていたと推測されている。古墳の築造年代としては出土した遺物などから3世紀末から4世紀初頭と考えられている。

▲石塚山古墳

▲石塚山古墳主体部

指定年月日／1953年3月31日

国指定重要文化財

所蔵 宇原神社

指定年月日／1990年5月30日

町指定 考古資料

所蔵 歴史資料館

4 石塚山古墳出土品

石塚山古墳出土品の指定は国の重要文化財と町の考古資料の2種類がある。国指定のものは江戸時代の史料に1796年（寛政8）銅鏡10数面・剣・矛・鏃の出土が記されているが、現存する遺物は銅鏡（三角縁神獣鏡）7面・素環頭大刀片・銅鏃1で、近くの宇原神社の所蔵となっている。一方、町の指定は、1987年の苅田町教育委員会の発掘調査によって出土した銅鏡1（細線式獣帯鏡片）・装身具（琥珀製勾玉1・碧玉製管玉4）・武具（小札革綴冑片・靫片）・武器（鉄鏃）工具（刀子片・槍鉋片・斧4）などの副葬品と、土器（飯蛸壷を含む）で、資料館で展示されている。

石塚山古墳出土鏡はすべて舶載の三角縁神獣鏡で、京都椿井大塚山古墳、奈良黒塚古墳、大分赤塚古墳などと同笵鏡を分有する。前期の前方後円墳としての規模やさまざまな副葬品などは被葬者の威信を示すものと考えられている。

▲三角縁獣文帯「天王日月」銘三神三獣鏡

▲三角縁獣文帯「天王日月」銘三神三獣鏡

▲三角縁獣文帯「日日日全」銘三神三獣鏡

▲三角縁獣文帯「天王日月」銘四神四獣鏡

▲三角縁獣文帯「天王日月」銘四神四獣鏡

▲三角縁「吾作」銘四神四獣鏡

▲三角縁獣文帯「日・月」銘八神四獣鏡

▲勾玉・管玉

▲小札革綴冑残欠

5 御所山古墳

所在地 大字与原

国指定 史跡

当時の海岸線に沿って、南北に伸びた低丘陵上に築造された北部九州屈指の規模を誇る前方後円墳である。古墳の全長約120m、北側の前方部先端幅82m・南側の後円部径73mを測り、墳丘が3段築造で墳丘の周囲には幅約5mの周溝を巡らし、これらを含めると全長約140mの大きさとなる。墳丘は人頭大の葺石で覆われ、平坦面を中心に埴輪を樹立していた。

江戸時代の文献史料『太宰管内志』に1820年（文政3）主体部が開口したと記されている。1887年（明治20）、東京大学の坪井正五郎博士が主体部の調査を行っており、その報告によると、前方部に向かって開口する大型の横穴式石室があり、羨道が狭く、玄室は床面が長方形プランを呈し、石障で屍床分けすると言う特徴をもつ。主体部からは銅鏡（四禽四獣鏡）・装身具（勾玉・管玉）・武具（甲・冑残欠）・武器（鉄鏃）・馬具残欠などの副葬品が出土し、現在宮内庁に保管されている。

これらの出土品や墳丘構造から築造年代は5世紀前半～中頃と考えられている。調査が古く、情報が限られているが、屍床分けされた石室構造は豊前地方唯一のもので筑肥文化の影響が強いとされる。また馬具は形式的に朝鮮半島の高句麗～新羅系のもので、御所山古墳の被葬者が当時の東アジアを巡る国際情勢に深くかかわっていたことが伺える。

▲御所山古墳

6 番塚古墳

所在地 大字尾倉字与原433-5

県指定 史跡

番塚古墳は御所山古墳から北へ約300mの丘陵に築造された墳長50mの前方後円墳で、後円部に主体部が築造されている。主体部の構造が墓室に至るトンネル状の通路がなく、天井が低いという古式の様相を呈する。石室内には2名の被葬者が木棺に埋葬されていたと思われ、副葬品には中国から伝来した神獣歌舞画像鏡をはじめ、朝鮮半島南部との交流を示す鳥足タタキ文様壷のほか高句麗の装飾古墳等に見られる月を象徴とする蛙型の木棺飾り、大刀刀身に百済武寧王陵出土銅剣などに見られる魚と蓮の文様を金で象嵌したものなど多様な副葬品が出土している。これらの副葬品や石室構造から5世紀の築造で、6世紀に追葬が行われ、被葬者が生前深く中国・朝鮮半島との交流に関わっていたことがうかがえる。

▲蛙形飾金具

▲大刀

▲番塚古墳

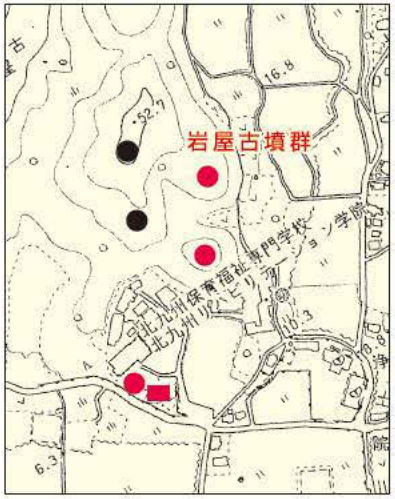
7 岩屋古墳群

町指定史跡

所在地 大字下片島字岩屋

学校法人戸早学園（保育・福祉専門学校）内の丘陵上に所在する7基の円墳・方墳で構成された古墳群で、その中の3号～6号墳が町指定史跡となっている。発掘調査は1996～98年に行われ、6号墳からは木棺墓と箱式石棺墓の2基の主体部が発見された。4号墳は6世紀前半の築造と考えられる木棺墓で、盗掘されていたが、銅鏡・玉類・剣が副葬されていた。また周溝からは須恵器などが出土した。3号墳は、古墳群のなかで最大規模のもので、この地区で最盛期を築いた被葬者の墳墓と考えられる。

▲4・5号墳全景（上空から）



▲岩屋古墳群

8 恩塚古墳

町指定史跡

所在地 大字新津字恩塚

新津の大原八幡神社裏の丘陵上に築造された大型の円墳で、この時期の古墳としては珍しく単独で築かれている。

墳丘がほぼ完在し、径約25m、高さ約4．5m、周溝は確認できない。主体部の長さ約6．5mの複式構造の横穴式石室で東南に向いて開口している。玄室は正方形プランに近く、比較的大型の石材を使用する。

数度の盗掘にあっていたが主体部から耳環・ガラス玉・管玉などの装身具のほか馬具片や須恵器などが出土している。

以上のことから恩塚古墳は6世紀築造されたこの地域を支配した豪族の墓と考えられている。

▲玄室より石室入口

▲恩塚古墳全景

9 雨窪古墳

所在地 若久町3丁目

町指定史跡

西から伸びた微高丘陵上の旧企救郡と京都郡の境界近くに築造された大型円墳で墳丘は著しく削平されており、本来の規模は不明である。

主体部は東南に向いて開口する複式構造の横穴式石室で、石室の長さは羨道を含めて約10mを測り、前室に対して玄室は約2倍の長さがあり、巨石石材を利用する。石室から馬具や須恵器などが出土しており、築造年代は6世紀末頃と推測される。

雨窪古墳は苅田町北部最大の古墳で、かつては周辺に小円墳群があったが、現在は消滅している。

以上のことからこれらの古墳群は本町北部の向山地区～小倉南区にかけて確認されている須恵器窯跡群の技術者とその統括者の墳墓群と考えられている。

▲羨道より石室内

▲雨窪古墳

10 谷遺跡出土品

所蔵 歴史資料館

町指定考古資料

谷遺跡は1988年に県営圃場整備事業として調査された遺跡で、苅田町大字谷に所在する。多様な出土品のうち、特に重要なものとして唐三彩の陶枕片と緑釉の碗と碗蓋がある。

唐三彩とは、中国の唐代に作られた陶器の一種で主に貴族の墓に副葬された明器で、日本での出土例は少なく、太宰府市の都府楼跡や鴻臚館・宗像沖ノ島などの重要な遺跡からしか出土していない非常に貴重なものである。後者の緑釉陶器は日本で唐三彩に似せて作られた緑の釉薬をかけたもので、谷遺跡出土品は周防産と思われる。

谷遺跡から出土した唐三彩陶枕片はその形態や色調が遣唐使に参加した僧慈恵が持ち帰ったとされる奈良大安寺出土のものとよく似ており、8世紀代の盛唐期に作られ、大安寺のものと同時期に日本に運ばれたものと考えられている。

▲唐三彩

▲緑釉陶器碗

▲谷遺跡調査区

11 等覚寺出土経筒

所蔵 歴史資料館

県指定 考古資料

1918年、現在の白山多賀神社社殿裏から出土したと伝えられる3口の経筒のうち現存する2口の銅製経筒である。不明の経筒には筒身に「大治四年」（1129）の紀年銘と願主名が記されていた。

経筒とは平安時代に始まった末法思想の一環として、経典などを書写して山の頂上などに小石室を作り、埋納する際の容器とした、一種のタイムカプセルで、これらのものを含めて経塚と呼んだ。経塚造営の最も古い例は1007年（寛弘4）の藤原道長による奈良県金峯山埋納とされている。

豊前地方は山岳修験の山々によって多くの経塚が築かれ、経筒の形態や様式、素材など多様である。等覚寺出土の銅製経筒は何れも、鋳銅製有節式のもので、形態的特徴から平安時代後期、12世紀の所産と考えられている。

▲白山多賀神社

▲銅製経筒

12 内尾薬師如来

所蔵 宝蔵院相圓寺

県指定 彫刻

大字馬場の殿川ダム北岸の鍾乳洞窟内に安置されている天台宗宝蔵院相圓寺の本尊薬師如来坐像で内尾の薬師如来として地元の人々の信仰を集めている。岩盤の上に座した木造薬師如来像の像高は275cmを測り、その大きさは仏像の基準とされる一丈六尺（丈六）サイズに相当する。クスノキ材の寄せ木造りの上に厚い布張りがなされ、表面は肌が赤漆、他は黒漆で調整された彫眼の像である。江戸時代に小笠原氏の信仰が厚く、大規模な修理が行われているが、全体に分厚く量感あふれる力強い造形は九州でも数少ない平安後期の作品である。

また山の急斜面はアラカシ（コナラ属常緑樹）とナンテンの群生地で、内尾山相圓寺の参道を覆い隠すように繁り、ダム湖畔との美しい景観を作っている。

▲内尾のアラカシ林

▲内尾薬師如来

13 平清経塚

所在地 大字馬場

町指定 石造品

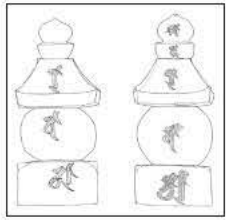
県道須磨園・南原・曽根線の馬場信号機から西約50mのところにある通称平清経塚と呼ばれる供養塔で、『京都郡誌』に豊前の柳が浦で入水した平清経の遺体が苅田の浜に流れ着き、土地の宿老達によって火葬されて埋葬されていたものを、後年諸国行脚のおり、立ち寄った最明寺入道時頼によって清経の霊を慰めるため3基の五輪塔を建てられたと記されている。

1993年に町が行った調査によって、ほかにも宝篋印塔はじめ一石五輪塔・板碑などが確認され、それらの形態的特徴から3基の大型五輪塔のうち2基は鎌倉、残りの1基は江戸時代、その他の石塔は戦国時代のもので、貴重な中世墓を形成している。

鎌倉時代の五輪塔は凝灰岩で作られたもので、梵字が彫りこまれており、その規模などから地頭クラスの墓と推測されている。

清経伝説は宇佐市柳ヶ浦などにもあり、この地の清経伝説は巷間に流布したものが伝承として固定したものと考えられる。

注）平清経・・平重盛の3男、清盛の孫。
「清経」は能の代表的演目としても知られる。



▲平 清経塚　五輪塔実測図

▲平 清経塚

14 松山城跡

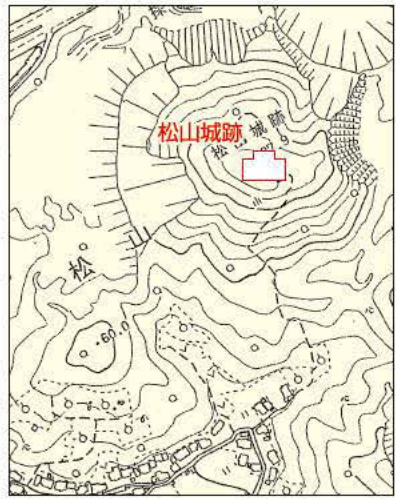
所在地 大字松山

町指定 史跡

松山城は周防灘側に半島状に伸びた山頂を中心に展開している中世山城で、かつては豊前国第一の要害山城と呼ばれた。古記によれば740年（天平12）藤原広嗣によって築城され、中世には豊後の大友と周防の大内の戦いの場になったと伝えられる。その後何度か城主が代わり、細川氏の豊前国入部ののち廃城になったという。1988～90年に行われた調査によって、山頂には大手門と主郭が築かれ、その東に2の郭、3の郭、虎口が設けられていた。最も東側には、小城と呼ばれた郭もあった。

各遺構には三つ巴丸瓦、三葉桐文・唐草文の軒平瓦など大量の古瓦が散在しており、おそらくこれらの屋根瓦を葺いた建造物は、1587年（天正15）国主として豊前国に入部した黒田時代のものであろう。かつては半島全域に及んでいたと思われる横堀や竪堀、土塁が山頂を取り囲んで斜面に残っている。

なお苅田町西側高城山（標高416m）に同じく戦国時代の高城山山城跡がある。



▲松山城城跡

▲２の郭トレンチ軒丸瓦出土状態

▲松山城跡航空写真

指定年月日／1998年12月16日

15 等覚寺の松会

国指定重要無形民俗文化財

開催場所　白山多賀神社（大字山口字等覚寺）

カルスト台地平尾台に連なる山脈の中腹、標高約300mの地点にある白山多賀神社（等覚寺）で毎年4月第3日曜日に開催される、豊前修験道の春の予祝神事で、その起源は鎌倉～室町時代にさかのぼる。英彦山豊前坊などでも同様の祭りが行われていたが、その多くは明治の神仏分離などによって途絶えている。ここ等覚寺では祭りの最も重要な幣切り行事を中心に田行事から刀行事まで一連の所作が昔ながらの形態を留めている。修験道華やかなりし頃を髣髴させる祭りである。

また、等覚寺地区の北谷の棚田は1992年に農林水産省によって農村景観100選に選ばれた。松会行事と同じく、山伏の末裔によって守られ、美しい里山の風景となっている。

▲農林水産省の農林景観百選に選ばれた等覚寺の棚田の風景

▲幣切り

▲祭り行列

▲田打ち

▲獅子舞

▲おとんぼし

▲鬼会

▲薙刀舞

▲流鏑馬

▲楽打

16 苅田山笠

県指定無形民俗文化財

開催場所　町役場前広場（富久町1丁目）

苅田山笠は宇原神社の秋祭りで、その起源は、宇原神社縁起によると1597年（慶長2）にさかのぼる。当初は8月15日に実施された夏祭りであったが、現在は10月の第一日曜日に開催される京築地方最大の秋祭りとなっている。

神幸祭当日、旧宮所の浮殿の地（役場前広場）の神事場に神輿に続いて思い思いに意匠を凝らした飾り山笠14基が勢ぞろいする。山笠は宇原神社の氏子15区によって出され、役場前広場でお披露目される。その後それぞれの区に戻る際に、山同士がぶつかり合って「突き当て」をするので別名「喧嘩山笠」とも呼ばれる。

▲灯山

▲山笠「突き当て」

▲山笠（町役場前広場）

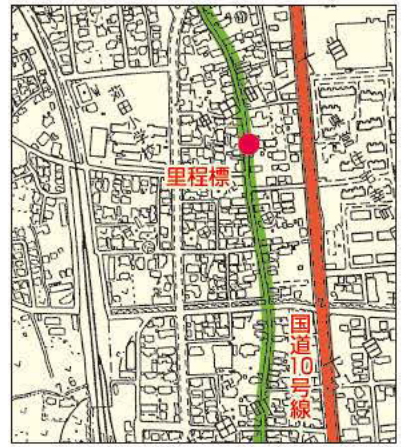
17 郡界石と里程標

所在地　若久町3丁目・神田町2丁目

旧中津往来沿いに立てられた郡界石と里程標が町内に残っている。

郡界石は江戸時代に藩が郡の境を示すために設置した標柱で、国道10号線西鉄宇土バス停近く、海側に入ったところにあり、高さ約2mの石柱の2面に「従是西企救郡」「従是東京都郡」と刻字されている。

里程標は同じく江戸時代に藩が距離を示すために設置した標柱で、神田町2丁目にあり、4面に「従是椎田迄四里半」「従是久保新町迄四里」「従是小倉迄三里半」「従是大里迄四里半」と刻字されている。

▲里程標

▲郡界石